

藤井啓行先生を偲んで

吉 田 卓

昭和40年春、新学期が始まったばかりの大学の構内には、どこことなく活気があった。私は授業開始を少し緊張の面持ちで待っていた。開け放たれた教室の窓からは心地よい風がはいりこんでいた。私は窓からの光景を楽しんでいた。行き交う人々の流れのなか、ダンディーに帽子をかぶり、指揮者の外山雄三氏を彷彿させる雰囲気を持ち主が目にとまったが、すぐに学舎の中へと消えた。しばらくして、教室に入って来られた紳士が、さきほど私に強い印象を与えた方であった。ドイツから帰国されて間のない、藤井先生との出会いは、30年近く経った今でも鮮明に覚えている。先生からはヘッセをはじめとして、ゲーテ、ツヴァイク、シュトルムを中心に多くのドイツの詩人を学んだ。私が学部から大学院へと進むにつれて、先生のお顔も少し丸みを帯びられ、優しい笑顔からこぼれる白い歯が印象的であった。大学院で行われる先生の講義は、先生のお人柄と気品さえ感じられて楽しみであった。ある時、新劇の切符があるからと言って、ブレヒトの芝居に誘って下さったことがあった。これを機に師弟間の一層濃やかな交情が始まった。昭和46年、幸運にも先生方の御推薦のおかげで就職が内定した。上野駅より北に旅行したこともない私は、東北の地に赴任することに、一抹の不安を感じていた。そんな折り、藤井先生の発案で私を力づけるための歓送会を開いて下さった。まだ20代の半ばであった私は、不安と緊張の中にも、同席して下さった恩師、先輩、友人たちの温かさが身にしみた。短い陸奥の生活であったが、翌年には大阪に戻ることが決定した。昭和48年の秋、藤井先生はまだ東北新幹線のない頃の青森に、「君が大阪に戻ると、君の働いているところが見られないからね」と言って、はるばるやって来て下さった。私の研究室や、赴任して半年間、大学が宿舎代わりに世話してくれた旅館に下宿していたが、それも見たいと言われて、御

案内した。数日間、先生と二人で私のアパートで過ごした。先生は御自身の金沢時代のことと重ね合わせて、なつかしように昔のことを話して下さい。紅葉の十和田湖、奥入瀬溪流、八甲田山を私の運転で、陸奥の晩秋を満喫して下さい。先生は時々、御自身の過ぎ去った日の心象風景を辿るようなことがあった。昭和50年頃、私の発案で先生と御一緒に明石海峡を望む海軍経理学校の校舎跡を訪ねたことがあった。先生は、しばらく遠い少年の日の追憶に耽っておられるようだった。昭和56年、藤井先生は心から私の結婚を喜んで下さった。この時の先生の温かいお人柄が、今も深い印象となって残っている。私たちは6月に結婚式を挙げ、新婚旅行は夏休みになるまで延ばしていた。その日が平日で早朝であるため、自分の身内にも断っていることを理由にして、先生にもご遠慮申し上げた。しかし当日、先生は空港までわざわざ見送りに来て下さった。旅行から戻って先生に御挨拶に上がると、数枚の写真を下さった。見るとその中に私たちの乗った飛行機が離陸して、空のかなたに飛んで行くものがあった。先生は私たちを見送ったあとも、ひとり空港ビルの屋上から私たち夫婦の前途をいつまでも祝福して下さいていたのだ。先生はまた、御自身の仕事場を大切にされ、そこにおられる人々に対しても、優しくて気配りのある方だった。私は久しぶりに訪ねた関大の合研や視聴覚教室などで、先生のお優しさを目の当たりにした。先生と関係の深い大阪日独協会は、先生の拠り所とさえ見えた。先生は協会に協力的で、熱心な受講生に出会えるのを楽しみにされていた。同僚の先生のことでは、亡くなった和田先生が入院中の頃、「見舞いに行くと、和田君が喜んでくれるので、行くようにしている」と悲しそうなお顔をされて言われたことがあった。藤井先生が葬儀委員長を務められた和田先生の告別式のことと併せて今も思い出す。両先生とも寒い日に亡くなられた。筆不精の私に対して先生は筆まめであった。ドイツからのも含めてかなりの数にのぼる。今それらを読み返して見ると、どれも先生の誠実なお人柄が溢れている。中には手術の前日に書かれたものもあって、胸が締め付けられる思いがする。先生の入院中は、努めてお元気な頃のお姿を思い出し、また御一緒に出かけられるよう、先生の御回復を祈っていた。伊豆の大島に出かけた時は、三原山の噴火口を一周した。先生は歩くのがとても早かった。昭和58年、静岡で学会があったとき、

バス観光をした。先生と私は座席指定の最前列であった。数列後ろに偶然、二宮まや先生が座っておられた。三保の松原、東海大学の水族館などを見て廻った。ガイドさんがクイズを出すと、先生は真っ先に答えておられた。一般乗客のほか、学会関係の先生方も多く乗っておられただけに、先生の屈託なくさわやかな一面がひととき目立った。昨秋の富山大学の学会に合わせて行われたヘッセの研究会で、思いがけず先生にお目にかかれて、本当に嬉しかった。研究会では、共同の仕事について、先生は貴重なご意見を述べられた。今思い出しても、このあと数カ月にして亡くなられる人の発言とは思えないような建設的な内容であった。会合の後、富山駅まで少し距離があったが、二人で歩いた。いつもなら気軽にタクシーに乗るところだが、何となく二人とも一緒に歩きたい気持ちであった。これが先生と一緒に歩いた最後となった。このあと先生は再び名古屋の病院に入院された。冬休みに入るのを待って、先生のお見舞いに上がった。点滴中の御不自由なお体にもかかわらず、喜んで下さった。何をお話したかは今は正確には思い出せない。ふっくらとしていた先生の頬が、痩せて小さくなっていた。ここからアルプスの山々が見えるのだよ、と言って高層の病室から遙かかなたに目を凝らされた。このお言葉そのものが、長い入院生活を物語っておられるようで、胸が詰まる思いであった。平成5年も慌ただしく暮れて行った。今年の2月12・13日、地方入試で私は名古屋に来ていた。市内いたる所、前日降った雪が残っていた。監督をしながら時々窓外の溶けてゆく雪を眺めていたが、心は先生との再会のことばかりを考えていた。答案の確認を終え、病院へ急いだ。道路に残った雪が日陰の所では凍って、何度か滑りそうになった。先生はすでに転院されていた。先生の訃報に接したのは、それから10日ばかり後のことであった。涙がとめどなく流れ出し、先生のお元氣な頃のお姿が次から次と浮かんできて、堪えられなかった。先生にはもっともっと、長生きをして、あの慈愛に満ちた眼差しで見守って欲しかった。ほぼ30年、先生からは文字通り公私にわたって、親身になった温かい薫陶を受けることのできた私は本当に幸せであった。先生あの円満で福々しい笑顔を生涯忘れることはできない。藤井先生ありがとうございました。心からの御礼と哀惜の情を捧げます。